

りも小さかった。

演題 5. 口蓋癒痕組織の顎顔面骨におよぼす影響と顎整形力の効果に関する実験的研究

○八木 寛, 石川富士郎

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

口蓋に形成された癒痕組織が、成長期の顔面骨のどの範囲まで影響を及ぼすのか、また、外科的侵襲を受けた顎骨に早期に成長誘導を行った場合、顔面骨にどのような変化が生じるかを実験的に検討した。実験は 4 カ月の雑種犬を用い、Ⅰ群：無処置の対象群、Ⅱ群：外科処置のみの群、Ⅲ群：外科処置後拡大群の 3 群に分けて行った。顎骨の成長発育を観察するため、2 週ごとに頭部 X 線規格写真を撮影し、さらに上顎歯列の石膏模型を製作して計測した。硬組織の観察はラベリングを行い、第 4 前臼歯部において非脱灰研磨標本を製作し、口蓋骨および縫合部を蛍光顕微鏡下にて観察した。また、口蓋粘膜は口蓋切除部位の左右第 4 前臼歯間の中央部を剝離し、通法に従いパラフィン包埋し前額断に薄切後、H. E 染色を行い組織学的に観察した。

結果：顎整形力を加えたⅢ群と、外科処置のみのⅡ群との間では、実験開始 14 週後、頭部 X 線規格写真写真上の前臼歯部幅径は、平均 1.6 mm、後臼歯部幅径は平均 1.5 mm、頬骨弓間幅径は 2.5 mm、石膏模型上における歯槽頂後縁部幅径は平均 2.1 mm と差が認められた。また、口蓋上顎縫合および頬骨上顎縫合部のラベリング層は、Ⅲ群がⅡ群より厚く認められ、顎整形力が口蓋部のみならず周囲の縫合部まで影響していることが明らかであった。また、口蓋粘膜は、Ⅱ群では上皮突起が肥厚し、網状層の下層では粗剛なコラーゲン線維が横走り部分的に直行する束状のコラーゲン線維を認めたのに対し、Ⅲ群では上皮突起は肥厚しておらず、網状層の下層では主に横走する顕著なコラーゲン線維の束が認められた。以上より、口蓋に癒痕組織を有する顎骨に対して成長期の早い時期から積極的に顎整形力を加えることは、形態的な量の変化のみならず、新生骨の量や口蓋粘膜上皮、および上皮下の組織にまで影響を与える事が分かった。また、成長誘導を早い時期から行うことが、その後の発育を有利に誘導する効果が大きいことを示唆しているものと思われた。

演題 6. ケニア共和国における歯周疾患の地域比較に関する研究

田附 敏良

岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座

平成 5 年度文部省科学研究費補助金国際学術調査「ケニア諸部族の食文化と歯科疾患に関する保健学的研究」の一環として、ケニア共和国の生活環境の異なる 3 地域を対象として口腔衛生習慣と歯科疾患について疫学的調査を行った。

調査の地域は、首都 Nairobi (N)、僻地の Lodwar (L) と新興都市の Kericho (K) であり、対象者数の男女総合計は 1,159 名である。年代群を 2 歳未満、2～5 歳代、6～13 歳代、14～19 歳代、20～39 歳代、40 歳以上（最高年齢 78 歳）の 6 段階に分類し評価した。調査方法は、歯肉炎と歯垢の診査は明視下のもとに行い、歯口清掃状況は面接調査を行った。歯肉炎の診査は、すべての現在歯について歯肉炎の最も進行した部位を診査し、その程度を Russel の診査基準の変法に基づいて判定した。歯垢の診査はすべての歯について行い、OHI-S の変法により最大のスコアを個人の代表値とした。食生活は、L 地域では摂取される食物は単調で量も少なく、間食は水を飲む程度であるが、K 地域は、砂糖、ミルク入り紅茶を多量に飲んでいるのが特徴である。N 地域は、日本の大都市と同様に、豊富に食材が入手可能である。結果は、3 地域ともに年代が上昇するにしたがい、歯肉炎の罹患率は高くなり、14～19 歳代頃から重症化の傾向がみられた。L 地域では、他の 2 地域と比較し、歯肉の状態は良好であった。N 地域では、5 歳代以下の歯肉炎が目立ち、14～19 歳代には一時的に低くなるが、K 地域の 20 歳代以上では歯肉炎は悪化する傾向であった。歯肉炎と歯垢には強い関連が認められたが、歯肉炎と歯口清掃状況には関連はみられなかった。さらに、歯垢付着におよぼす地域と歯口清掃状況の関連では、地域には強い関連がみられたが、歯口清掃状況にはみられなかった。以上のことより、歯肉炎の原因として歯垢が考えられたが、歯垢の付着には、歯口清掃状況より、食生活を中心とする環境要因が大きいことが示唆された。